

一 般 演 題

1. 腫瘍マーカー PIVKA-II の使用経験

金森 勇雄 古川 雅一 奥村 恭己
樋口ちづ子 (大垣市民病院放技部)
中野 哲 武田 功 熊田 卓
杉山 恵一 長田 敏正 (同・消化器)
佐々木常雄 (名大・技短・放)

AFP とは異なる新しい肝腫瘍マーカーである血中 PIVKA-II を, AFP, Ferritin と同時に測定し, その臨床診断面についての有用性を検討した。

結果, 1) PIVKA-II は AFP と同様に肝細胞癌に対して特異性に優れるものと思われた。2) PIVKA-II と AFP, Ferritin の Combination assay により肝細胞癌の診断率は向上した。3) PIVKA-II の陽性率は肝細胞癌の腫瘍径の増大に伴い上昇した。4) PIVKA-II は, TAE 後有意に低下し, 治療効果の判定にも有用な指標になるものと示唆された。

2. 骨塩定量装置 QDR-1000 の使用経験

——口腔外科領域への応用——

中島 鉄夫 石森 佳之 上坂 秀樹
松下 照雄 外山 貴士 小鳥 輝男
石井 靖 (福井医大・放)
玉井 学 石井 保雄 (同・口腔外)

食生活の欧米化に伴い, 伝統的な和食に比して固いものを食べる機会が増え, 総義歯のより確実な固定が望まれているが, 総義歯装用年代の患者は骨粗鬆症に罹患している場合が多く, 全抜歯後に下顎骨萎縮が進行し, 総義歯の確実な固定がし難い。このため骨粗鬆症と下顎骨萎縮の関連および重症度・進行速度が予測できれば治療方針に大いに役立つと思われるが, 定量的な評価方法は未だ確立されていない。今回われわれは, その定量化に役立つと思われる, X線骨塩定量装置 QDR-1000 のバージョン・アップにより可能となった下顎骨の骨塩測定方法について報告した。

3. 当センターにおける PET の空間線量について

加藤 統之 百石 悟 荒木 克己
伴野 辰雄
(名古屋市リハビリテーションセンター)

ポジトロン CT (PET) 検査に用いられる放射性医薬品は, SPECT 等の核医学検査に使用される医薬品に比べ, 半減期は短い γ 線のエネルギーはかなり高い (511 keV)。PET 検査に従事するスタッフの被曝を調べるため, 検査時の空間線量が測定された。PET 室における空間線量の測定は, ラドコン線量計 500 により行われた。その結果, PET 室での年間被曝線量として 2~4 mSv の値が得られた。また, スタッフの着用したフィルムバッジの値からの推定も合わせて, 比較的被曝量の多い薬剤合成者を含め, PET 検査従事者の年間被曝線量値は, 実効線量当量限度 (50 mSv/年) のおおよそ 1/10 以下と見積られた。

4. Whole body スキャンを利用した全身 RI angiography の経験

多田 明 平 栄 立野 育郎
(国立金沢病院・放)
西 克機 小畑 敏典
(同・アイソトープ室)

血管病変の画像診断の方法としては, 血管造影を始めとして DAS, CT, US, RI など各種のものがあるが, いずれもある限られた範囲しか視野に入らなかった。今回, 核医学の全身スキャンベッドを利用した, 一回の静注で全身の血流状態と全身の臓器の血液プール像を撮像する方法を試みた。核種は体内標識 Tc-99m RBC で, 静注 4 秒後から, ガンマカメラを 150cm/分の速さで頭部から下肢へ移動させた。結果; 腹部大動脈は 100% 評価でき, 大腿動脈は 82% で描出できた。ASO をはじめ, 動脈硬化性病変の最初のスクリーニング検査として有用と考えた。